

所 感



巻頭言

佐々木 喜 男*

昨今国民の共通の話題の一つとして教育の問題がとりあげられております。このことについては臨時教育審議会が各専門分野の方々の論議を集約し、その答申を逐次公表していることは周知のところであります。しかしその内容をよく検討してみるとかなり具体的な問題を対象として勧告等が行われてはいますが、なんとなく問題の捉え方が表面的で本質的なものとは程遠い感触を受けるのは私一人ではないと思います。思えば明治維新を成就し、近代国家への道を歩み始めた我国が百年に亘って求めたものが歴史的にみると富国強兵あるいは富国富民であったのはそれなりの必然性があり、従って教育の理想、目的、制度等がその線に沿ったものになったのは当然のことでしょう。私たちが最近の諸体験からいなくことは現行の受験制度がきびしい教育状況をもたらしているのは加速度的に発展する産業社会が経済効率のよい人材を一義的に要求するという強大な圧力が最大の原因ではないかという疑問であります。我国はさきの第二次世界大戦後、高等教育の大衆化が進行する一方で教育の能率第一主義も、又著しく進み、教育における自由度の減少がもたらされたように思います。企業は大学に、大学は高

校に、高校は中・小学校に、中・小学校は家庭に責任を転嫁しても現在の構造は容易に修正できるものではなく、百年に亘る国家的規模の実験結果が現在の姿といえます。しかし資源小国であること、人口並に生活水準の維持等の圧力の強さを思うと理想より現実の重みに視点を移さざるを得ないことも事実で、研究投資をみても基礎研究よりも開発乃至は応用研究への重点投資を先行せざるを得ないということになります。しかし我国の置かれた歴史的現実、科学と技術との関り合いを思うと、我々が海のものとも山のものとも判らぬ基礎研究に熱意と理解を示し、又科学における新しい概念等を創出すれば自から道が開け、ある意味では先進国といえない我国への評価も変わるであろうし、又その潜在能力も具備しているはずで悲観する必要はありません。昨今の欧米ではかつて1960年代における東洋思想への関心もうすれ伝統への回帰が強まっており、現在の日本ブームも単に経済発展への興味からで東洋思想への関心とは無関係になっていると聞きます。この様な状況に対しても前述のことは尚更考えておく必要があります。

*佐々木喜男 (Yoshio SASAKI), 大阪大学薬学部, 製薬化学科, 教授, 薬学博士, 薬品分析化学